神戸

生活から変革の視点を
医療を告発する全国集会開く

水俣病・スモンなど医療被害や薬害を告発する運動の前進によって、被災者に対する救済保障がある程度とられるようになったものの、むしろその結果、運動が解体あるいは停滞をまねき、被害は形をかえむしろ広範に拡散し、医療被害や薬害がますます増えつづけている。このような現状のなかで、「日本の医療を告発するすべての人びとの集い、第八回全国集会」は、二十、二十一の両日、神戸市にある兵庫県民会館と神大医学部でおこなわれた。集会には二日間を通して延べ七百人をこえる人たちが参加した。

二十日午後一時半から兵庫県民会館でおこなわれた総会では春木幸子（兵庫県スモンの会）、柏木順子（未熟児網膜症から子を守る会）沢崎悦子（甲山園事件被告）、楠敏雄（全国障害解放運動連絡会議事務局）、広春夫（平和台病院労組）上田（全国精神病者集団）、栃村長生（全国青年医歯科師連絡会議）、高橋晄正（集会呼びかけ人）の各氏が発言した。そのなかで春木さんは、「スモンの会だけではどうにもならない。金はとっても運動がまけていく情況を克服するためには、全体的な破壊をくいとめていくための戦線が必要だ。まず生産と生活の場で地道な闘いをしていこう」と訴えた。

二十一日午前九時からは、神大医学部の各教室で第一分科会「薬害・医療被害と市民」、第二分科会「労働環境と健康破壊——労災職業病」、第三分科会「医療労働者の告発と闘い——医療労働運動」、第四分科会「海外侵出・国内治安と医療」、第五分科会「『障害者』解放と医療」の五つの分科会にわかれて討論、午後一時半から参加者全員で神戸市内をデモ行進、三時すぎ散会した。

集会で基調報告をおこなった高橋晄正氏の発言要旨は次の通り。

一、サリドマイド裁判を始め薬害の裁判が次々に和解になっていく。ここでは国が訴えられている。国の機関である裁判所は国の医薬行政の犯罪性を徹底的に暴こうとせず、責任の所在をあいまいのままに終らせ、原告にとって何が何だかわからなくさせている。その結果薬害医療被害は続出している。

一、現在問題になっている医療被害薬害は、人類の生存基盤崩壊を示すほんの一コマにすぎない。

一、三里塚闘争の本質は公共の名で農業を切捨てようとするところにある。農民は何代もかかって荒地を黒い肥沃な土地にかえ、その土地に合った作物の体系をつくりあげてきた。ところが政府の用意した代替地は赤い土だ。土地であればいいというものではない。公共の名の下にこんなことが許されていいわけがない。

一、資本家は科学を悪用して、有害なものを営利主義にもとづいてつくりまくり、人類の生存基盤を切り捨てていく。資本主義と人類の生存とは両立しない。この資本主義を保証しているのが権力だ。これを支えている日本医学会総会は来年東京で開かれる。来年の日本医学会総会粉砕の闘いを、資本主義解体の出発点としてとりくもう。

労災職業病分科会の報告
各地で共闘組織結成

五月二十、二十一の両日にわたって、日本の医療を告発するすべての人びとのつどい、第八回全国集会が神戸市でおこなわれた。初日の総会につづいて二日目には神大医学部で五つの分科会にわかれて交流と討論がくり広げられた。

第二分科会「労働環境と健康破壊（労災職業病）」は全国各地から約百名が参加した。冒頭、関西労働者安全センターと大阪府被災労働者同盟、京都府立医大現医研の三団体で構成する分科会事務局が基調報告をおこなった。

基調報告は労災闘争の現状を以下のように分析している。第一には政治経済情勢が厳しくなるにしたがってあらゆる闘争が困難になっているが、その中で労災闘争は人間の譲れぬ一線を守る闘いであり、多くの人が一致して闘うことのできる闘いとして重要である。日産自動車栃木工場のストライキは疲弊した労働者人民に大きな共感をもって受けとめられていること。

第二には健康破壊を個人の不摂生と宿命の中に封じこめようとする宣伝、労災法、労安法、労基則三十五条の改悪、産業医大開校、健保法改悪など、政府資本家階級の闘争妨害にもかかわらず、生命と健康を守る闘いが着実に発展してきていること。より詳しくは、①全国各地に労災職業病を闘う共闘組織が下からの闘いの中でかちとられてきていること②関西労働者安全センターの六年にわたる運動の中で、労組・被災者・知識人の独自の闘いと共闘が大きく前進したこと③全港湾等でみられるように、大衆的な自主健診運動が全国に広がってきていること④労安法改悪、労基則三十五条の闘い等を通じて、先進的な知識人の交流が前進していること⑤クロム、マンガン、じん肺など被災者組織が発展してきていること、これらがその内容である。

第三には、労災闘争主体の力量はまだまだ微力であるが、運動が圧倒的多数の人々の利益を代表している限り大きな力となること。労基則三十五条改悪反対の闘いが、東京労災法改悪阻止実、神奈川労職センター、関西安全センターの三団体によって開始されたが、総評等労働組合、被災者全体の闘いとなって発展したことがそのことを示しているということ。

分科会は午前中は関西、特に大阪の運動についての報告が行われた。全港湾大阪支部安全委員会、兵庫労働者安全センター保母の脳卒中労災認定を闘う神戸市職労、植田マンガン訴訟を支援する会、労働者ハリ学習会、関西労働者安全センター、京都府医大現医研がそれぞれの闘いを報告した。

デモをはさんで午後は、全国各地の労災闘争の共闘組織の交流を中心とした報告が行われた。東京のクロム禍被害者の会はスライドを交え、クロム禍絶滅への広範な統一戦線を呼びかけ、神奈川労災職業病センターからは今年一月にセンター結成をかちとった経過が報告され、北部九州労働者安全センターからは、西鉄バスのワンマンカー運転手の頸肩腕の労災認定勝利をきっかけに組織が活発化し産業医大の闘争を経て、現在集団検診の運動を準備中との力強い報告があった。その他、広島労職研、東京労災法改悪阻止実、名古屋でこの春頸肩腕の認定を地域をあげての闘いでかちとった西田氏の報告などが行われた。

分科会は最後に次の四つのスローガンを確認して終った。①全国各地に生命と健康を守る共闘組織をかちとろう②被災者組織の拡大強化に努めよう③進歩的知識人と労働者階級の結合をかちとろう④労働者の生きる権利を剥奪する反動立法、法改悪に反対し闘おう。

3・26三里塚に感激
パレスチナ解放戦士 銃高くかかげ喜ぶ

日本赤軍

日本赤軍は五月十四日東京都新宿区の東京オリンピック記念青少年研修センターで開いた「パレスチナデー・東京」にメッセージをよせてきた。次はその要旨である。

5・14集会にあつまられたすべての皆さん！パレスチナ、アラブの戦場より日本赤軍はすべての兵士の名において団結のあいさつを送ります。五月は六年前私たちの先達が占領下パレスチナの敵の心臓部で闘い抜き、パレスチナ人民と日本人民の血をかけた橋を築いた私たちにとっても、日本人民とパレスチナ人民の連帯にとっても意義深い日です。私たちは六年前の先達の闘いを思いおこし、更に自らを点検し、革命を堅持し、日本人民、パレスチナ人民と団結し、共に進んでいく決意です。

今、パレスチナでは敵シオニスト、帝国主義者どもとの闘いは困難な局面を迎えています。パレスチナ解放勢力による領内での闘いの拡大を恐れたシオニストは、一挙に南部レバノンを侵略し、パレスチナ人民、レバノン人民へ陸海空から無差別砲撃、爆撃を加え、再び数百の人民を殺りくしています。パレスチナ解放勢力とパレスチナ人民、レバノン人民は、この非道な侵略に対し、人民と革命陣地を守り抜くために闘いつづけています。

シオニストの代弁者であり手先であるカタエブは、パレスチナ人がいるからこのようになるのだ、パレスチナ人をレバノンから追出せと叫びつづけ、パレスチナ人民、ともに闘かおうとするレバノン人民に対して武器を向け、殺りくをくりかえしてきました。

今回の侵略は同時に米帝と結託し、国連軍の導入をもって「合法的」な安全弁を確保する野望をもって実行されている。これはシオニストの侵略地域の国連軍による制圧として実現されています。この国連軍とは南朝鮮の国連軍の実体が米帝であるように、その実体は仏帝軍です。仏帝はシオニスト・米帝とその手先であるカタエブと共謀し、パレスチナ革命の圧殺のために、アラブの平和維持軍の主力であり、帝国主義の介入を阻止し、現状維持の力となっているシリア軍を追出し、自ら国連軍の名目で全土を支配しようとたくらんでいます。

パレスチナ—レバノン人民は、敵の陰謀をみぬき、闘いを堅持し、敵の包囲を最良の戦場として政治的軍事的に奴らを打ちくだこうとしています。奴らの包囲分断策動に対し、パレスチナ、レバノン人民は団結を最大の武器とし、国内外のあらゆる反帝勢力とひとつに結びあっていくことが問われています。

日本においても帝国主義者は革命を恐怖し、自らの延命のために人民内部に分裂と対立を持込んでいます。いま日本帝国主義は自らつくりだした危機の中で、一層反動性をあらわにしています。三里塚闘争を柱とする日本人民の地域個別の闘いに対して破防法適用、成田立法、ピストル使用などの法的軍事的圧殺と、新聞・マスコミを通して闘いの正義をねじまげ、分断、孤立化をはかろうとしています。もう一方で支配階級の危機を国民的危機にすりかえ、国民の利益、公共の利益の名の下に「現実路線」を押しつけ、階級性の弱い反体制潮流をまきこみ、弱体化した支配階級を補充させようとしています。奴らは弾圧、分断支配をすすめ、人民が生きていくために革命を求め、生きていくために闘うことを圧殺し、自らの矛盾を人民におしつけ、侵略とファシズムの軍国主義の道を歩みつづけています。

三月二十六日、三里塚において成田空港開港阻止を勝ちとった団結した日本人民の闘いは、国境をこえ、数千キロはなれたパレスチナ人民へ大きな勇気を与え、真の連帯を表明しています。戦火の中で開港阻止のニュースをきいたパレスチナの戦士たちは銃を高くかかげ、自分たちのことのように感激し、私たちを激励してくれています。持ち場での団結した、人として生きるための闘いは、もっとも雄弁な力となり、真の国際主義の力として、パレスチナ人民に力を与えています。私たちは闘うものの心は一つだと実感しています。

持ち場で人として生きるために力を合せてゆきましょう。敵が押しつける困難のなかで、団結した人民の力こそが新しい前途を切りひらいてゆきます。力を合せて困難にぶつかる時、勇気がわき希望が生れてきます。みんなの力で新しい前途を切り開いていくために、小さな闘い、ひとりひとりの闘いを結びつけ、団結し、日本帝国主義を確実に撃ちつづけましょう。

私たち日本赤軍はさらに自らを変え、団結をめざし、団結を求め、団結を武器として闘い抜く事を約束します。

一九七八年五月一日、メーデーの日に

× × ×

自転車デモ駈け巡る
「死刑執行阻止」の旗立て

11・22救援会

21日の日曜日、大阪ミナミの盛り場を、「白玉光・李哲・康宗憲ら六氏の死刑執行阻止！」「徐俊植氏への社会安全法適用阻止——完全釈放」などとかいたのぼりを立てた自転車デモがかけめぐり、行楽の家族連れも足をとめていた。

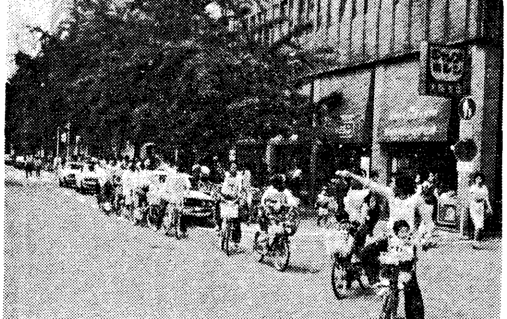
主催は在日韓国人留学生スパイデッチあげ事件の救援組織の一つ11・22救援大阪連絡会議、後援が11・22救援会、徐君兄弟を救う会、社会安全法適用阻止署名実行委員会。いま11・22事件関係者を始め無実の罪をきせられた六十数人の在日韓国人が朴政権によって不当に拘束され、そのうち六名が既に死刑判決をうけている。二月二十八日韓国大法院は姜宇奎氏（六十一才）の上告を棄却、死刑が確定、昨年三月八日大法院で死刑が確定した李哲氏に対しては近日中に再審請求が棄却されるのではないかといわれている。獄中であくまで転向を拒否する在監者に対して手錠をかけっぱなしにしたり、拷問を強化する一方、反共法・国家保安法違反等で死刑が確定していた金達男氏を昨年十二月二十五日釈放帰国させ、彼の「転向」発言を朴政権の御用新聞が派手に宣伝するなど、家族会と救援活動に対する分断策動もつよまっている。

一九七一年に逮捕され七年の刑をうけた徐俊植氏は、今年の五月二十七日に刑期満了を迎えるが、予防拘禁制度の「社会安全法」が適用され、「罪を認めない」「反共思想ではない」などの理由で、引きつづき拘束される可能性がつよまっている。このような事態になれば不当な拘束者と家族に対する影響は非常に大きい。

このような情勢のなかで救援運動の中心課題を白玉光・李哲・康宗憲ら六氏の死刑執行を阻止し、徐俊植氏への社会安全法適用阻止——完全釈放の実現におき、五月二十四日には全関西集会、五月二十七日韓国大使館抗議行動を予定している。その前段として二十一日に大阪韓国領事館抗議自転車デモをおこなった。

二十一日午後一時には大阪北区の南天満公園には五十人あまりの労働者学生市民が結集、なかには子供連れの人もいる。集会では京都徐君兄弟を守る会、死刑阻止共闘、家族僑胞の会、11・22救援大阪連絡 会議、李東石さんを救う会、11・22事件救援会などの代表が発言した。

午後二時半ごろ出発近くになって降りだした俄か雨をおして、それぞれ「死刑執行阻止」「完全釈放」などのスローガンをかいたゼッケンをつけ、のぼりをつけた自転車のペダルをこいで、雑踏の街へくりだした。北浜から淀屋橋をへて御堂筋へ。心斎橋の韓国領事館前では完全武装の機動隊を配備、子供連れの自転車デモに対してものものしい警備ぶりだ。先頭の宣伝カーをわざわざ私服刑事が止めて、街頭宣伝の許可証をみせろという。領事館前で宣伝の格好の機会を警察が与えてくれた。この機会を逃さずボリューム一杯にあげる。行楽の家族連れも立ちどまって耳を傾ける姿もみられた。デモ隊はナンバから恵美須町、通天閣を通って天王寺公園に到着、午後五時すぎに解散した。



韓国領事館前で抗議のシュプレヒーコールをする自転車デモ隊